

GBT社長・竹内宏の  
磨き作業が楽しくなる!  
失敗しない  
磨き術  
— 試行錯誤の磨き体験記より —

竹内宏 (たけうちひろし)

ジーアンドティー代表取締役。1961年生まれ。1980年にマツダオート大阪へ入社し、1984年に独立し保険代理店兼中古車販売業を営む傍ら、カーディテリングに触れる。1987年に廃業し、テロソソコーポレーションのグループ会社にカーディテリングの本部社員として入社。大手カー用品店にコーティングビジネスを提案し、自らも実験店で現場作業に従事する。その後自動車補修用品の営業経験を積み、2003年に再び独立してジーアンドティーを設立。サンマイト社サンドペーパーの東日本代理店として磨き関連商品を販売しながら、講習会を積極的に開催するなどアフターケアを重視した営業手法を展開している。



## [第9回] 自己復元型耐スリ傷性クリヤーの失敗しない磨き術

いよいよ今回は、耐スリ傷性クリヤーの磨きについて解説します。

通常の磨きについても、各工程に関しさらに具体的に解説できるのですが、近頃どの工場に出向いても耐スリ傷性クリヤーについて質問されますので、先に採り上げることにしました。

近年、日産スクラッチシールドやトヨタ・セルフリストアリングコートなどの耐スリ傷性クリヤーが高級車の新車塗装に採用されることが多くなり、補修用製品も各塗料メーカーから様々な製品名で販売されています。ここでは、耐スリ傷性クリヤーの中でも、一度付いた小傷を自動的に修復するものの磨きについて説明します。

自動車メーカーによれば、このクリヤーは一般的なクリヤーよりも緻密で、しかも弾性に富む分子構造になっており、自己復元性がありながら耐候性や耐薬品性にも優れているそうです。しかしながら、スリ傷は復元するのに対し、磨き傷は逆に戻りやすいという、何とも厄介な代物なのです。

現場の声をまとめますと、「P3000のペーパー目がなかなか消えない」、「何度磨いても傷が戻って大変」、「磨

いてはあぶり、三度繰り返したら戻りがなくなっただ」など、苦労している様子がうかがえます。施工の経験のない人は実感がないため、「本当にそんなに難しいの?」と半信半疑のようです。

指数は磨きの難しさが考慮された数値に設定されているようですが、磨き戻りのリスクが高いことを考えると割に合わない場合も考えられます。

私自身も、塗料メーカーの技術の方に質問するなど、理論上の情報を集めて適切な磨き方を研究していますが、まだ完全にはマニュアル化できていないのが正直なところです。しかしながら、何度も現場で磨いているうちに、おおよその勘所が分かるようになりましたので、その体験に基づきアドバイスしていきたいと思います。

工程の説明に入る前に、なぜ磨きが難しいと言われているのか、ポイントを整理してみましょう。

- ・小傷は復元するらしいが磨き傷は逆に後で戻ってくる
- ・磨き作業により熱が加わると、通常のクリヤーより戻り傷が出やすい
- ・細目のバフ傷がなかなか消えないため、粗い粒子のコンパウンドが使えず

ペーパー目の処理に時間がかかる

・一般的に硬いと言われているクリヤーよりも傷が消えにくい

以上の点に注意しながら作業を進めなければ、せっかく磨いても翌日にはバフ目やペーパー目が戻ってしまっており、最初から磨き直さなければならなくなってしまいます。

では、今のところうまくいっている作業方法を紹介させていただきます。

### 1. 塗装時の注意点

自己復元型耐スリ傷性クリヤーは、ペーパー傷も塗り肌も調整しにくいいため、ゴミが付きにくい環境で、塗装時にほぼ肌を作るつもりで作業する必要があります。

強制乾燥は、メーカーの指定時間よりやや長めに設定したほうが良いようです(クリヤー塗布後の復元性にどの程度影響するか分かりませんが、磨きの点からは乾燥が進んだほうが確実に磨きやすくなります)。

### 2. ゴミ取り

P2000より粗いペーパー目を消すことが難しいので、ブツ取りにP1500は

## 自己復元型耐スリ傷性クリヤー磨き作業の手順



耐スリ傷性クリヤーに適したタイプの細目コンパウンドとミニバフを使用し、ゴミを取った後のペーパー目をピンポイントで磨く



細目または極細目コンパウンドで、ミニバフで残ったペーパー目を消しながらボカシ磨きをする



バフ目に戻ることを対策として、コンパウンドを超微粒子タイプに換え、仕上げ用の羊毛バフで磨く



スポンジバフで磨いて完全に仕上げる。数時間後、濡れたクロスで拭き上げ、バフ目の戻りなどが発生していないことを確認したら、作業完了

使用しないほうが良いでしょう。時間が掛かってもP3000だけで処理したほうが無難です。

### 3.ペーパー目の処理

肌ができている想定ですので、ピンポイントで処理します。

まず、ミニポリッシャーでペーパー目の部分だけを磨きます。細目（あまり粗いものは避けましょう）のコンパウンドとウールバフの組み合わせで、8割方消えるまでゆっくり磨きます。その後濡れたクロスで拭いて、状態を確認します。この時点でペーパー目がなかなか消えないようなら、もう一度一定時間、強制乾燥を行ったほうがよいでしょう。

ほとんどの場合はそれで磨けるようですが、それでも消えない場合は無理せず翌日、もう一度同じ作業を行います。それでも消えない場合は、時間を掛けて少しずつ作業するしかありません。コンパウンドについては最近、細目と極細目の中間ぐらいのタイプが販売されていますので、通常細目よりもそちらのほうが良いと思います。当社でも自己復元型耐スリ傷性クリヤ

ーに適したタイプを用意しています。

### 4.本磨き

極細目のコンパウンドと羊毛バフでペーパー目の残りを除去します。通常のシングルアクションポリッシャーと、通常サイズの羊毛バフでOKです。

羊毛バフの毛足は、発熱を抑えるために長めのタイプを選択してください。この作業ではペーパー目の部分だけではなく、周辺も一緒に磨きます。完全にペーパー目が消えるまで丁寧に作業します。ポリッシャーの回転数は800rpm以下です。

### 5.仕上げ磨き

本磨き後、濡れたクロスで塗面を清掃し、ペーパー目が残っていないかをチェックします。工程ごとに濡れたクロスで清掃することにより、塗面のチェックと同時に塗面を冷やし、磨き戻りを最小限に抑える効果があります。

この時点でほぼ仕上がっているようですが、もう一度羊毛バフと超微粒子コンパウンドで仕上げ磨きを行います。

自己復元型耐スリ傷性クリヤーは数時間後に確認すると、度合いの多少は

ありますが、必ず磨き戻りがあると想定してください。その際の戻り傷を最小限に抑えるために、一見仕上がっている塗面を超微粒子でさらに磨き込んでおきます。

### 6.最終磨き

ここでようやくスポンジバフの出番です。見た目には、バフ目もほぼ目立たない状態に仕上がっていると思います。しかし、磨き戻りのリスクを考えて、見えていないが戻りかもしれない浅いバフ傷を消すつもりで、丁寧にパネル全体を磨きます。

これで、完成です。ここまでで4工程ですが、慣れてくれば2工程でも仕上げることは可能です。しかし傷が戻るリスクは、私も確実に予想することはできません。

現時点では、自己復元型耐スリ傷性クリヤーに関しては、早く仕上げることもよりもクレームにならないよう、可能な限りリスクを減らす方法を考えたほうが無難だと思います。今後もさらに情報を集めて、より素早く確実に磨ける方法が見付かりましたら報告いたします。